

緻密な研究を理想にして

『アルフレート・シュッツのウィーン』⁽¹⁾の場合

森 元 孝

社会学も、他の多くの学と同じように翻訳学問の要素を備えている。そのことにより、とりわけその思想や理論を学ぶ際に、しばしば研究者は、それぞれ独特の体裁で外国物の紹介に汲々とするところがある。しかし問題は、その学び方である。「パーソンズからハバマス」「コミュニケーション的転換」というような標語を掲げた「論文」「著書」の多くは、学的という点でも、また紹介という点でも貧弱なことがしばしばある。せいぜい片仮名表記法に、その研究者のオリジナルを見いだせるにすぎないのである。そうした研究スタイルに胡座して、自分の思想をカタカナ表現の固有名詞で格好づけしているだけでは問題が多い。

思想や理論を学ぼうという場合、洋書店で新刊書を見つけ、それを紹介したり、自分の勝手な思い(理論?)に、標語風に訳せるところだけをはめ込むようなスタイルは、外国へ行くことが格別の出来事であり、欧文を適当に和文にすれば学者をやっていた時代にはいざ知れず、社会学においても、もうやめなければならない。留学をすることが、外国の著名な先生から教えることであるという伝統的な考え方も、交通通信手段が飛躍的に発展し、国際会議が日常化し、海外の情報をリアル・タイムに得ることができるようになった現代、社会学においては、とりわけ意味のないものとなったと私は考える。どここの某教授のもとで学んだということだけでは、何の意味もないのである。むしろ、社会学が最も得意とする地域研究や生活史の研究法を、思想や理論を学ぶということにも適用するために、外国で学ぶということに意味があると考える必要がある。昨年、公刊した『アルフレート・シュッツのウィーン』は、そうした理念のもとに書いたものである。

1. シュッツへの関心

すぐに誰々の専門家ということが大事にされる日本の社会学界においては、私はシュッツの専門家ではないし、そうなると思ったこともない。しかしそれにもかかわらず、ウィーン時代のシュッツを主題にするに至ったかを述べておきたい。

「シュッツ」という名前を初めて耳にしたのは、1978年度早稲田大学教育学部における故下田直春教授の講義においてであった。方法論的主観主義とその客観主義をめぐる講義であった。講義の始まり、すなわち春から「シュッツ」の名を聞いていた。冬の定期試験において、シュッツについて当時、まとめて書かれた唯一の書であった先生の『社会学的方法の基礎』(新泉社)の持ち込みが許された。私の成績は「可」であった。返された答案には、先生の書き込みがあり、「もっと勉強しろ」と朱書きしてあった。帰りのバスの中で、それは破り捨てた。

そうした事件の少し前、78年秋、新宿紀伊国屋書店で、ズール・カンブ社から出版されたパーソンズとシュッツの往復書簡⁽²⁾を目にして、ただちに購入していた。ちょうど、故丹下隆一先生のもとでパーソンズの『社会的行為の構造』について卒業論文を作成中であったので、その書の中に収められたシュッツによる、パーソンズの『社会的行為の構造』についての書評は、非常に興味深かった。

卒業後、早稲田大学大学院文学研究科に入院して驚いたのは、「やはり大学院」、シュッツの専門家たちが、もうすでにいたことである。同期に入院した山崎敬一先生(現埼玉大学)や、既に博士課程に進まれている西原和久先生(現名古屋大学)が、すでに体系的にシュッツの著作に向かわれていたのである。当時すでに新潟大学で教鞭をとっておられた那須壽先生(現早稲田大学)とともに、現在の日本の現象学的社会学研究の重鎮となられている方々である。

他のことに、より強い興味があって、1980年から1年間、ウィーンに住むことになった。書類上は留学には違いないが、外国へ行くというどころか、飛行機にも初めて乗るという状態であり、留学にはほど遠いものであった。たまたま、ウィーンはシュッツの生まれ故郷であり、彼の生前唯一の著書『社会的世界の意味構成』⁽³⁾は、ウィーンで出版されたものであった。しかし、当時の私には、そのことはそれほど重要ではなかった。

帰国後、大学院に復学。今と同様に貧弱なカリキュラムしかなかったから、ほぼどの先生のものにも出席したが、在学中に行った主要な事柄は、家でハーバマスやルーマンの著作を読むことと、当時、定期的に早稲田奉仕園で開かれていた「批判理論研究会」に参加することであった。ただし、唯一の例外として1981年と1982年秋元律郎先生が担当なさっていた特論と演習への参加は今へのステップになっている。「第二次大戦前のドイツおよびオーストリアの社会学」がテーマであったが、そこで読んだレプシウスやシェルスキー、そしてオーストリアの若い社会学者たちの、歴史事情を説明した論文は、学的な技術を学ぶという点では、ほとんど意味のないものであったが、漠然とした関心に、あるイメージを与えるのに役だった。つまり、過去の栄光を述べた論文や、レプシウスとシェルスキーに見られる感情的な歴史回顧を読むことは、そこそこにしておいて、この頃の事情について、もっと緻密に調べあげれば、きっと色々なことがわかるだろうという気配を感じたのである。

具体的には、20世紀になってから中部ヨーロッパに勢力基盤を築いた社会民主主義を調べようという関心となった。そんなところから、マクス・アドラーやオットー・バウアーの書物を読むようになった。そのうちに、ポール・ラザースフェルトが、彼らオーストリア・マルクス主義者から並々な影響を受けていたということがわかり、彼がオーストリアで実施したいいくつかの社会調査活動を集中的に調べ始めた。だが、大学院の博士課程は、いわゆる改革の聲みに習い、院生の自主性を尊重するかのような進歩的教員を装う人が多いわりには、今も課程中に博士号を取るためのプログラムは何も準備されておらず無責任に放置されているのは今と同じで、博士論文の準備のための時間のほとんどは、生活費を稼ぐのと、なぜか学部の調査実習の「お手伝い」のために失われた。

幸運にも職に就いて、ラザースフェルトの足跡を調べるため、ウィーンを訪れることができたのは、1988年5月であった。ちょうどドイツとの合邦から50年ということもあり、予定していたマリーエンタール訪問以外にも、多くのことを学んだ。また、偶然、オーストリア放送が制作したテレビ映画を見ることができた。『マリーエンタールの失業者』⁽⁴⁾に描かれている実状と、その調査活動を再現するものである。1920年代の典型的な青年社会民主主義者ラザースフェルトの一面をかいま見たが、この時の訪問でわかったことは、日本では知られていないだけで、オーストリアでは、ラザースフェルトについてはかなり詳細な研究がなされているということであった。したがって、既存の著作類を読んで知識を増やし、整理することで、私のラザースフェルト研究は終わることになった。

2. 草稿「生活諸形式と意味構造」

1989年の8月、数日ウィーンを訪れる機会があり、友人に、翌年夏長期に滞在できそうなおところはなか探しておいて欲しいと頼み、1990年7月、およそ2カ月間滞在することができた。ラザースフェルトについて独自の研究を進めることはできそうになかったため、他のテーマを探して、渡航前までに、ショルスケの『世紀末ウィーン』⁽⁵⁾などを熟読していた。歴史学の研究書に関心が向いたこともあって、「市民の生成」というようなテーマを考えていた。ただし、このテーマは、あまりに大きすぎて、きっと挫折するに違いないとは感じていた。そうした漠然としたままの渡航ではあったが、すでに存在は知っていたが手にしたことのない書物を、ウィーン、シュッテン・トアにある書店で目にした。イリヤ・スルバールが編纂した、シュッツの1920年代の草稿からなる『生活諸形式と意味構造』⁽⁶⁾である。

幾つかの草稿を集めたものであるから、その解説部分に経緯や当時のウィーンの状況が触れている箇所があり、すぐに読み始めたのだが、いざシュッツ自身の草稿の部分に入って、その難しさにびっくりした。日本で「シュッツ！ シュッツ！」と呪文を唱えている人たちが、この書については何も言わない、いや言えないわけがよく理解できた。一度には読めそうもないので、毎日時間を決めてワープロで全文逐訳していくことにした。ウィーンまで来て逐訳をしているのではあほらしいので、以前からの関心の延長で、社会民主主義者たちが1920年代に行った街づくりについて、今も残る建造物などの撮影とともに（写真1）それに関する文書類を集め、読みまくった。

帰国しても、逐訳作業はまだまだ続いていったが、気がついたことはシュッツの名著『社会的世界の意味構成』も、もっと緻密に読まなければならないということであった。既に英訳、邦訳もあり、部分的にはすでに読んだことはあった。しかし、徹底的に読もうと思ったので、先ず邦訳の精読をした。翌年の春まで、二度しっかり読んで、いろいろな疑問が浮かんだ。英訳は、原著とはかけ離れたところがありすぎるので、そこそこにしておいた。原著第四章の社会的世界の構成論を展開しているところについては、そ

の重要性から先ず自分用の全訳を作ることにした。それまでの自分の理解が非常に皮相的なもので偏見にとらわれているということを感じた。しかし反面、日本で色々な形で紹介されているシュッツが、アメリカに渡ってからの業績に基づくもの、またそこでの門下生たちの紹介記事をもとにしたものであり、まだ知られていない重要な問題があるのではないかという印象を得た。

シュッツについて調べ尽くそうという気持ちは、すでにはっきりとしていたが、ムジールの小説に関心が向いたり、プファービガン著『マックス・アドラー』⁽⁷⁾を読んだ時には、その徹底した資料収集と緻密な分析にびっくりさせられたりしていた。とくに後者の著は、思想や理論を学ぶとは、こういうことをするのだと教えられた。

1990年末に早稲田大学社会科学研究所の紀要『社会科学討究』に投稿した「アルフレート・シュッツとウィーン」は、これらかなり雑多な関心を、無理矢理まとめたものである。その点で、かなり論点が散逸した代物でしかなかった。



(写真1) 赤いウィーンの建造物とモニュメント

3. 在外研究

在外研究という制度が早稲田大学にもあり、10年に一度であるとか、学部・専修によっては2年間行けるとか、1年間しかだめだとか、色々と教員の間では話題になる。そして、在外研究を終えると、色々なところで帰朝報告をさせられたりするのが通例である。どこでオペラを見たとか、何が美味しかったとか、ついには高名な某教授と並んだ写真を見せられ、「あんたは何をしに行っただのか？」とちょっと聞いてみたくなる思いをした人も少なくないであろう。得意満面に自慢話をしている先生たちが、在外研究後、どんな業績を生んだか、就中、「高い授業料を払ってきた」「大学の先生は楽そうだ」等などと思ったことのある人は、調査してみると、いろいろと面白いこともわかってる。

私は、夏休みを二回重ねて14カ月間ウィーンに滞在させてもらった。早稲田大学からは、月々の給料、それに夏期、年末、期末のそれぞれの手当(半年後とに前払いであり、国外に居住するということで所得税と翌年の住民税が免除される)以外に、220万円の研究費の支給を受けた。文学部は教員数が多く、大学経営上、収益の点でよくないということなのか、他の学部の380万円のそれよりかなり低い。大学が、支給される研究費の半分の相当額まで3年間無利子で、不足する研究費を貸してくれるというので、110万円を借りた。それ以外に妻と、この日のために貯めた100万円程の活動資金を頼りに、1992年7月に渡航した。

1992年の夏は、猛暑で、ウィーンでも38度を二度経験した。永年の友人から、当座の間、借りたアパートは西向きで、日本より緯度の高いウィーンでは9時を過ぎても、光がさし込み、また当然寒冷地ゆえ、クーラーはなく、かなり参った。ボスニアでの内戦が本格化し、外国人流入が多くなり、適当な住まいを確保するのに苦労した。新聞広告を見て電話をしたり、新聞に「住居求む」の広告を出したりしたあげく、手数料を取られるが不動産屋をあたることにした。幸運にも最初に紹介されたところが、これ以上のところはないというほどの好条件であったので、即決した。8区ランゲガッセ(Langegasse)にあり、かつて「留学」した時に住んだところに近かった。家主さんは、絵画のレントゲンによる鑑定技術者であり、それからほぼ1年間にわたって、快適な暮らしとともに、いろいろなことを教えていただいた。

14ヶ月の間にやることは、主に二つあった。ひとつは、『アルフレート・シュッツのウィーン』を完成させること、今ひとつは、同時通訳をめざし、わが国の社会学者の実力を大いに疑問視している優れた思想史

の研究者たちにも負けない技術を磨くことであった。14ヶ月の土日を除く大部分を、この二つのことにあてた。ほぼ毎日、20歳代前半の、もうすでに完璧にドイツ語を話すことのできるチェコ、ハンガリー、イタリア、アメリカなどからの学生と一緒に勉強した。

先に述べたプファービガン先生に、出国前にすでに「ご著書『マクス・アドラー』を読んで、その精密さを学ばせて欲しい」と手紙を書いて、私の仕事の相談役をお願いした。かなり知っているつもりでいたが、ウィーンで渉猟する際の基本的な情報、図書館、文書館・文書室の所在や、手がかりになりそうな人の電話番号を教えていただいた。10月の終わり頃までに、調査研究のほしい基本的な方針が決まっていた。まだ続いていた全文逐訳作業を、『社会的世界の意味構成』全体についても行き、かつその書の中でシュッツが指示している文献類について、すべて収集し、さらにシュッツととくに関係の深かったミーゼス、カウフマン、ケルゼン、フェーゲリンらについて調べ回った。ウィーン大学の図書館での収集から始めた。1993年始め頃からは、オーストリア国立図書館での収集も始めた。月曜から金曜まで欠かさず毎日通った。収集と同時に、できる限り全部読むようにした。シュッツとの関係でとくに重要だと思われた書物・論文は、やはり全文逐訳を行った。ドイツ語が多少上手でも、難しいものになると、日本語で考えてしまうゆえ、この方法しかなかった。どれについても、少しずつしか進まないし、やることは多く、朝4時に起きて5時まで「生活諸形式」の草稿、5時から6時までミーゼスの論文、7時までフェーゲリン、8時過ぎには大学に行って、学生になって授業を受け、水曜午後はプファービガンの講義と演習があるので、それ以外の昼頃は図書館の書庫に入り、2時間程して家に帰り、またカウフマンの論文、シュッツの『社会的世界の意味構成』の逐訳等々を午後7時まで続けるという日々が続いた。家事全般を見てくれる相棒のおかげもあって、1993年1月15日から『アルフレート・シュッツのウィーン』の第5章にあたる箇所から書き始めた。書きながら、内容の展開、すなわち目次で示した項目を整理していった。

4. コンスタンツ社会科学アルヒーフ

到着して4ヶ月経った頃、研究の見通しに多少の自信が出来たので、コンスタンツ大学のスルバル教授に手紙を書いて、シュッツの未公刊の草稿類を見たい旨伝えた。返事はすぐ来た。そして、1993年の3月中旬正味5日間、コンスタンツ大学にある社会科学アルヒーフを訪れた。正味というのは、朝7時過ぎから夜10時近くまで居たということである。当然のことながら、文書類を外に持ち出すことや、全部を複写することはできないので、とにかく読んでノートを取り、許可された範囲で写真を撮った。持参したマイクロ・レンズと8ミリ・ビデオが大変役立った。当初の予定では、6月にもう一度訪問する旨を伝えてあったが、期待を遥かに超えて長時間にわたって没頭する環境を与えてもらったので、ほぼ必要な文書についてはすべて目を通すことができた。しかし、非常に疲れたことは言うまでもなかった。

社会科学アルヒーフというように、シュッツのものだけがあるのではない。別にアルフレート・シュッツ記念アルヒーフ(Alfred Schütz-Gedächtnis-Archiv)という名称も持っており、たしかにシュッツに関しては、アメリカのエール大学にある草稿原本の複写マイクロ・フィルムのほかに、シュッツがウィーンからニューヨークに持っていった蔵書類も所蔵しており、シュッツについてはおそらく世界で最も充実しているであろう。しかし、注意しておく、このアルヒーフ、日本の普通の大学の資料室のようなところで、少々雑然としている。シュッツ以外にも、マンハイム、シュムペーターらの資料があるとのことであった。

さて、かなり集中的に調べたが、唯一やり残したことと言えば、このシュッツの蔵書を徹底的に調べるということである。というのも、シュッツの蔵書には、それぞれ重要な自筆書き込みを見いだすことができるからである。しかし、すでにバラバラになりそうなものもかなりあり、重要書について、調べる前に、保存方法を考え提案する必要がある、少し手にとってみる以上のことは不可能であった。これについては、いつか機会を作って試みたいところである。

やり残したことがあるとは言っても、シュッツが小学校からギムナジウム、そして大学に至るまでの成績証類、学位記なども細かく見ることができ、シュッツの生まれ育った環境を知るのに重要な情報を得ることができた。すでに、ウィーンで、当時の電話帳(写真2)から、シュッツ両親の住所を確認していたが、成績証などからも、そうした事実を再確認することができた。

5 . 銀行業協会

シュッツが学問活動をしていく間に、間違いなく読んでであろうミーゼスやケルゼンを始めとした多くの書物や論文類については、収集リストがどんどん増えていったが、ほぼ5月の末、すなわちウィーン大学では夏休みに入る頃には、必要と思われるものを揃えることができ、そのうちの大部分について目を通すことができた。大学図書館のみならず、法学部の図書室、経済学研究室などで必要なものをほぼ集めることができた。しかし、『アルフレート・シュッツのウィーン』という主題で研究を進めている限り、研究者シュッツ以外の面、とくに銀行業の実務家の面について明らかにする必要がどうしてもある。

シュッツについて、ほとんど唯一の研究書と言ってもよいワグナーの伝記には、シュッツが最初の勤め先としてオーストリア銀行協会 (Austrian Bankers Association) と記されている。コンスタンツ社会科学アルヒーフで見た、シュッツ夫人への二つのインタビュー記録にも、ほぼ同様の記載があった。しかし、これにあたるものを探し出すことは、英語による記載のため難しかった。

ミーゼスについて研究を進めているうちに、ミーゼス夫人によるミーゼスへの思い出の書に、シュッツ最初の仕事は、ミーゼス自身が世話をしたと書かれている(41頁)⁽⁸⁾。ミーゼス自身の自伝⁽⁹⁾にも、彼がウィーン商工会議所の研究室長であったことから、当時のウィーンの銀行と色々な関係があったことがわかる記述を見ることができる。とくに、オーストリア銀行業連盟 (Verbandnd Österreichischer Banken und Bankiers) は、ウィーン商工会議所と密接な関係があったことが、当時のそれぞれの紀要類を調べているうちにわかってきた。

紀要類のどこかに、シュッツの名前がないか、もしあればそれが手がかりになるのではと、とにかく探した。ある時には、ウィーン大学図書館で、どうしてそんなに大きな書物を一度にそんなにたくさん(館内だが)借り出す必要なのかと怪訝そうに言われ、それ以来、誰もいない書庫に入れるということを知り、入り込んで紀要の頁を一冊ずつ調べていった。唯一すでにアメリカの社会学者が自らの論文⁽¹⁰⁾で指示している論文(43頁)以外には見つけることができなかったが、それでも、まだシュッツの仕事先は不明のままであった。

ミーゼスは、戦後オーストリアには戻らなかったが、彼が定年まで勤めたウィーン商工会所の紀要 (Wirtschaftspolitische Blätter) は、ミーゼス逝去の時に特集号を出しており、それに寄稿していて、現在ウィーン大学で経済史の講義をしているバルツアレク教授の存在をつきとめた。彼に手紙を書いたら、即、



(写真2) ウィーン市の住居一覧

電話が返ってきた。シュッツの就職先は、ただちにはわからなかったが、当時の金融業界の年鑑(*Compass*)の存在を知らされ、やはり図書館ですべて見ていった。その25年から、たしかにシュッツの名前が載っていることを発見した⁽¹¹⁾。そして、銀行協会(Bankenvereinigung)の正式名をつきとめた。しかし、この協会が、先のオーストリア銀行業連盟とどのような関係があるのかについては、まだわからなかった。バルツアレク教授やオーストリア国立公文書館の研究者からも推測しか得ることができなかった。推測に共通していたのは、類似の業界団体があるのは、一方が社会民主党系だからだろうというものであったが、これは結果的に誤りであることがわかった。

正確に両者の関係を確認するための望みはあった。年鑑に記載されている以上、この団体は設立に際して行政府に届け出をしているはずである。最初、この種の届け先であるウィーン市役所文書室(写真3)で調べていった。現在は存在しないが、過去の届け出はあるはずでマイクロ・フィルムに収められた団体名を調べていった。届けを出した人名、あるいは団体名がわかれば、この団体がどういう性格のそれがわかると考えたからである。これはたいへんな作業だった。というのも、届けがほとんどすべて手書きであったからである。しかし、発見できなかった。文書室の研究者に教えられて、ウィーン商事裁判所(Wiener Handelsgericht)にある登録もすべてにわたって調べた。すでに消滅した団体の届けも保管されていたが、発見できなかった。さらに、オーストリア国立公文書館でも調べたがよくわからなかった。確認できないかもしれないと思っていた時、プファービガン教授から電話があり、当時の銀行の状況をよく知っている人と言えば、先年亡くなったエドワード・メルツ教授で、彼はその状況について大きな書物を残しているというのだ⁽¹²⁾。さっそく図書館で、それを見て、なるほど大きな書物で、これを全部読み終わるのは東京に戻ってからの正月頃だと思って、ペラペラめくっていたら、本当に幸運なことに小さな脚注に「Bankenvereinigung」という文字を見つけたのである。多少の説明も加えられており、さらに文献指示がなされていた。

指示してあった文献は、中部ヨーロッパ最大の銀行でありロスチャイルド家の銀行でもあるクレジット・バンク・フェライン銀行の百年史であった⁽¹³⁾。早速それを国立図書館で探し出し、必要なところを読み出した。その結果、シュッツが最初に勤めた銀行協会が、非常に特異な団体であることがわかった。1920年代前半の経済混乱に対処するために作られた団体であり、その時代の特殊事情をよく物語るものであった(42頁)。それゆえにシュッツは、1929年には、ライター社に移っていたのである。つまり、必然的に消滅する運命にあった団体だったのである。届け出が最終的であったかどうかについては、私の調査ではわからないままになったが、一応、団体の性格を十分に理解することができた。

さて今度は、このライター社の記録をオーストリア公文書館で、またオーストリア銀行業協会の記録をウィーン市文書室で調べていった。そうしてわかったことは、ライター社の持ち主エミル・ライターと、シュッツの父親とが、オーストリア銀行業会の理事として名を連ねていることがわかったのである(写真4)。ライター社を調べている際に、国立公文書館の研究者から、ユダヤ系であれば、オーストリアが併合される直前にドイツ政府(ナチ)が調査したユダヤ系資産家についての記録があるということをお示された。この文書は、その題名が示すように、今世紀の狂気を今も保存するものである。残された記録には、ライター夫妻、アルトゥール・プラーガー(銀行協会の所長)、シュッツの父親らのものがあった。シュッツ自身の名前もあったが、記録はなかった。当時の記録調書がそのまま残っており、そこには、映画では見たことのある、鉤十字を持った鷲の紋章が印刷されていて、頁をめくるとともに重苦しさとともに恐怖を感じた。例えば、ライター夫妻については、不動産類はもちろん、腕輪に至るまで、所持品を細かく事前調査していたことが、わかるのである。



(写真4) ウィーン市役所

6. フッサールのウィーン講演

もうひとつ調べるのに手こずったものは、フッサールが有名な『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の元になる講演を行った場所がウィーンのどこであったか、そして1935年に、どのようにしてフッサールをドイツからオーストリアに呼ぶことができたのかということであった。とくに後者については色々な謎があった。すでにドイツはヒトラー政権下にあったし、フッサールはユダヤ系である。さらに当時、ドイツとオーストリアとの関係は最悪であり、出入国は厳しく制限されていた(149頁以下、558頁)。

邦訳『ヨーロッパ諸学と超越論的現象学』は、たいへんに丹念な翻訳であるが、後書きにもそのころの経緯については原書のフッサール全集にある説明を超えるものは示されていない。銀行協会を調べたのと同様に、邦訳の説明にもあるウィーン文化連盟(Wiener Kulturbund)なるものを調べることにした。当時の住所録、電話帳を調べていくうちに、官公庁年鑑(Österreichischer Amts-Kalender)の中に、その正式の名称を見つけることができた。オーストリア文化連盟(Österreichischer Kulturbund)というのが、それであるが、その所在地には首を傾げた。ヨゼフ広場6番地とあったのだが、これは王宮の中なのである。これに関する文書をオーストリア国立公文書館で調べていった。少しつまらないことを言えば、日本語にして紹介するのであれば「ウィーン文化連盟」ではなく、「ウィーンの文化連盟」と訳すべきところだったのである。ともあれ、この連盟についての文書は、ただちに見つけることができた。しかも、この連盟の規約、さらに1923年からの定期公演のタイトルがすべてわかった(報告者については、550頁脚注172参照のこと)。たしかに、フッサールは1935年5月8日と10日に講演をしていたのである。しかし、この連盟の理事に名を連ねている人々を見て、所在地についても、そしてユダヤ系であるフッサールのドイツからの入国についても合点がいった。すでにオーストリアもファシズムの体制下にあったが、その当時の宰相、経団連会長ら草創たる人々の名を見ることができたからである(550頁脚注172)。

しかしながら、フッサールがウィーンのどこで講演をしたのかは、まだわからなかった。そこで思いついたのは、当時の新聞に、きっと講演案内が載っているであろうということであった。1935年5月始めの『新自由新聞(Neue Freie Presse)』を調べていくと、やはり案内があった⁽¹⁴⁾。現在のオーストリア工芸博物館(Österreichisches Museum für Angewandte Kunst)であることがわかったのである。

このフッサールの講演は、さらにプラハでのそののち、アルトゥール・リーベルトが編纂していた雑誌『フィロソフィア(Philosophia)』に掲載される。リーベルトは、当時ユーゴスラヴィアのベオグラード大学の教授であった。すでにドイツはヒトラー治下であり、戦争の危機は日に日に近づいていた。リーベルトの雑誌は、この危機に対して全世界の知識人が連帯しようと呼びかけるメディアとしようと構想されたものである。1936年から1938年までに3巻のみが出されたのであるが、これをつぶさに見ていくと、面白いことがわかった。まさにこの雑誌を媒体にして、全世界の知識人が一時つながっていたように見えるからである。リーベルトの主旨に賛同した人たちの名前と住所が載せられており、ドイツのフッサール、ア



(写真4) オーストリア銀行協会の理事会議事録の一部から

アメリカのモーリスなど著名人が多々載っているのである(559頁)。オーストリアでは、シュッツ、カウフマンとともに、マクス・アドラーやビューラー夫妻らの名前を見ることができた。さらにびっくりしたのは、当時の日本の哲学者たちも名を連ねていたことである。連絡先として、日本橋丸善、本郷福本書院などと記されており(写真5)、これにはある種の感激をした。

7. 自由主義の問題

さて、あまり事物探索の話だけをしていると、『アルフレート・シュッツのウィーン』は、そうした事実経過だけが書かれていると思われるかもしれないが、お読みいただいた方はおわかりのことだが、第6、8章、9章後半などは、シュッツが著書や草稿に表した思考の論理構造を徹底的に分析してあり、これらはこれまでなされていなかったものであるという自負がある。かなり長い期間にわたって逐訳と整理を続けた結果であり、またコンスタンツで集中的に読み込むことのできた成果だと思っている。

細かい内容は、本書を読んでいただくのが何よりであるが、シュッツの関心は、二つの社会主義、すなわち社会民主主義とキリスト教社会主義に圧倒された中で、まだなお古典的な自由主義の流れに発するものである。ミーゼスは、彼の正嫡の継承者ハイエクに読みとることができるよう、非常に戦闘的な自由主義の主唱者であった。ミーゼスの門下生たちは戦後、ことごとくアメリカで優れた活動を行っているが、シュッツもこの門下生と思想的には同質である。

だから、パーソンズとは対立せざるをえなかったのである。強調したことであるが、たしかにフッサールとの出会いはきわめて重要であるが、けっしてフッサールに逢ったゆえに、現象学に傾倒したのではないし、パーソンズとの書簡の往復の結果からパーソンズに対決する思想として現象学的社会学を構想したというでもない。そもそもメンガーからミーゼスに継承されている経済思想の中に、対立せざるをえない要因があったということである。このことは、第10章で詳しく書いたとおり、パーソンズが、『社会的行為の構造』において示している自らの思想彫琢作業を見ていくと理解できる。わが国の社会学者には、パーソンズに帰依した人たちが多く、ミーゼスからハイエク、そしてライオネル・ロビンズへと流れ、さらに戦後ウィーンからアメリカに渡ったミーゼス門下生と、ミーゼスがニューヨーク大学で育てた門下生たちの経済学と、パーソンズが育ったマーシャルとパレートの経済学との違いには目を向けてこなかった。たしかに、ミクロ経済学とマクロ経済学というようなおおざっぱな区別は誰でも知っているが、それ以上に根本的な点で、社会観に相違があるということを知る必要があったのに、それについては気がつかなかっ



(写真5) Philosophiの1937年の号に見える日本人会員たち

たのである。そのために、パーソンズとシュッツとの関係は、社会システム論あるいは構造機能主義に対する現象学的社会学という標語的な対立としてしか捉えられなかったのである。

8. ワープロ原稿の製本

さて、1993年9月後半に帰国して、早稲田大学での講義の合間を縫って、執筆を続行した。1992年6月に購入したPC-98note SX/Tに、シュッツ、ミーゼス、ケルゼン、フェーゲリン、カウフマンらの著作の全文逐訳したもの、執筆中の原稿などがつまり、使わないアプリケーションを処分しながら、データを保存する場所を作っていた。学位論文にするつもりであったので、どうしても緻密に仕上げたワープロ原稿を製本したものの完成を目標にした。「早稲田大学助教様だ！」と言って、「先輩諸先生」の例に習って早稲田大学出版部に擦りよって行くのは、あまりにみっともないし、そもそも学位論文は、そういうものではないとは思ったので、ワープロでもこんなにできるのだということを示したかった。早稲田での社会学の学位論文のほとんどは、なぜか早稲田大学出版部から出されているのである。この出版社が、どうのこうの言うつもりはないが、ここでしか出版物が出せないのは、まさに「早稲田大学の教員」のゆえであろう。私のものと、内容そしてその質はもちろんのことだが、本の装丁なども比べて欲しい。

原稿がほぼできあがったのは1994年5月後半であった。推敲を8月末まで続け、9月に『一太郎』のバージョン4をそのバージョン5にアップして仕上げ、レーザー・プリンターで出力した。執筆を始めた時には、まだバージョン4であり、脚注の文字のポイントを適当に小さくすることができなかったが、巧い具合にバージョン・アップを利用することができた。出力結果は、B4用紙400枚ほどになり、原稿用紙に換算すると400字詰で2200枚ほどにもなった。当初は、B5で出力して両面コピーということも考えたが、両面コピーを自動的に行う機械があるにはあるが、色々な手間を考え、多少抵抗があったがB4袋綴じとすることにした。学位論文は三部提出と決まっており、アメリカで在外研究中の那須壽先生に送る必要があるなあなどと思いながら、結局八部をコピーした。コピーにはほぼ1日を費やした。コピーのローラーが、あまりの量のため汚れ、電話で申し訳なく頼んで二回も業者にクリーニングをお願いした。

一部800頁近くになるので、上下分冊にした結果として、16冊分の製本を注文することになった。今は折るのに便利な機械ができたので、その手間はそれほどではなかったが、製本屋さんにとっていくのと、取ってくるのに体力が要った。また、コピーとともに、かなりの制作費がかかった。

9. 出版と著作権

出版することも、もちろん考えて仕事は進めてきた。当初は原稿用紙700枚程を予定していたから、どこかの出版社は、この価値を認めてくれるだろうと思っていた。しかし、2200枚となると少し事情が違って来る。だいたい、私自身、社会学の専門書でそれほどのものを見るのが少なかったからである。さらに、無名の私である。提出用製本の余分に制作した何部かは、色々な出版社に、「こんなのですか？」という見本として作ったので、早速、手紙を添えて某社に送ってみた。案の定、返事は来なかったし、この出版社は、返信用切手もつけて渡したのに、未だに私の製本原稿を返してくれない。どこかになくしてしまったのであろう。私自身、実に浅はかなもので、出来たらすぐに見せびらかしたがる気持ちがあったのである。そんな、言いようもないみっともなさもあって、興味がおありであれば、現物を持って伺いますという手紙だけを、数社に送ることにした。ただ条件があった。いまさら量的な縮小はできないので、全体を出版することと、頁ごとに脚注をつけるスタイルはそのままにしておくこと、索引をつけること(そしてそのための時間を与えてもらうこと)などが、それであった。二段組はできるだけ避けたいが、最終的には応じるつもりでいたが、脚注については、譲ることのできない絶対条件であった。日本の専門書の多くは脚注ではなく、後ろにまとめた注を持つことが多い。これはコストがかかるからとされているからであるが、原因の主たるものは、むしろアホらしい注をつける人たちが多からである。怪しげな自説をとうとうと書き連ね、注に、Habermas, *Legitimationsprobleme im Spätkapitalismus*, ... を参照、というような、本当は読んでもいないのに、権威づけをしている類の注が多すぎるから、多くの編集者が、嫌がるのである。すでに完成した原稿を見せて、脚注の必要性を説けば、普通の編集者なら理解してくれるはずである。

そうした点で、私は、出版してくれる出版社ならどこでもよいというわけではなかった。やはり、色々意見を言ってくれる編集者がいなくては、よい本にはならないから、今までに読んだ本についての印象

から、私のものを認めてくれそうなところを捜した。12月末になって、新評論社から、原稿を見せて欲しいという電話をもらった。1995年新年早々から制作の日程の話になった。

今一度全文を推敲したかったので、4月を目途に、原稿をフロッピー・ディスクで渡すことを約束した。少しでも出版経費を下げるために、校正を最低限とするように、強調部分、ゴシック、イタリック、倍角指定などの指示記号を、私自身が入れたテキスト・ファイルを渡した。また、索引作成のために、入力時に用語を指定できるように、索引で拾う用語にラインマーカーで印をつけていった。事項索引はピンク、人名索引はブルーという具合にである。5月には、初校が出て、再校が6月であった。やはり校正段階で赤が入った。また、編集者の進めもあって、学位論文には掲載しなかった写真類を入れることができた。1980年にウィーンを訪れて以来あったスライドやプリントから適当なものを選んでいった。

「シュッツ縁のスポット」を私の作った地図に記して学位論文にはおさめてあったが、デザイナーが、より美しく修正してくれた。また、本のカバーについては、私の希望を全面的に聞いていただき、希望を遥かに超える美しい仕上がりにまで持って行っていただいた。原稿全文にわたって、細かく目をとおしていただき、きれいな本ができたのは、新評論社のおかげである。

最後に、少々気をもんだのは、シュッツの顔写真と肉筆草稿写真を、どのように収めるかということである。他の写真は、すべて私が撮ったものであるから問題はないが、これらの掲載は許可が必要である。コンスタンツ社会科学アルヒーフでは、個人的な利用に限るという署名をしていたので、とりわけ出版物となると問題が少なくない。法的には著作権が切れているという主張もできそうだが、理論と思想の研究書ではあるが、雑誌の紹介記事や教科書類とは異なり、シュッツ自身のことについての書物ということにもなるので、欧米の研究者たちとの関係もあり、最も正当な手続きを踏んだ。とくにシュッツの顔写真は、ウィーン大学の学生証にあるものをマイクロ・レンズを通して複写したものであり、コンスタンツにしかない。草稿類についてはすでにアメリカやカナダにもあり、コンスタンツにあるものもアメリカにあるものを複写したマイクロ・フィルムであるが、私の知る限り、これまでの欧米のシュッツ研究書にも載せられたことがない。私は、最終的には載せられない場合には、それでもよいとも思ったが、出版物の趣は大きく変わってくることもたしかなので、スルバール教授に、掲載するもののコピーと一緒に許可が可能かどうかについて、急いでいたのでファックスを送ろうとした。しかし、ファックスの番号がわからず、直接、現在の赴任地、ニュルンベルク・エアランゲン大学に電話して番号を聞いた。夏休みになって誰も居なかったらとも心配したが、バイエルンは7月終わりまで授業期間だということですぐにファックスを送った。翌日、返事が来た。700頁にも及ぶ書物ということもあり、問題はないようにも思うが、最終的な許可は、シュッツの御息女にあるということで、ニューヨークに同じようなファックスを送った。しばらくして、「喜んで許可致します」という手紙をいただいた。

8月20日過ぎ、印刷が終わり、出版社に搬入されたという電話を受け、最初に開いたところに、校正ミスがあった。たいへん残念で、祝杯は少々苦く、悪酔いをしてしまった。

- (1) 森 元孝『アルフレート・シュッツのウィーン - 社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』新評論 1995年。なお、本文中()内の頁は、この書のものである。
- (2) Alfred Schütz, Talcott Parsons, *Zur Theorie des sozialen Handelns -Ein Briefwechsel*, Frankfurt am Main 1985. 佐藤嘉一訳『シュッツ - パーソンズ往復書簡 社会理論の構成』木鐸社 1980年)。
- (3) Alfred Schütz, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Wien 1932. (佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社 1980年)。
- (4) Hans Zeisel, Marie Jahoda, Paul Lazarsfeld, *Die Arbeitslose von Marienthal*, Wien/Frankfurt am Main 1933/75.
- (5) Carl E. Schorske, *Fin-De-Siècle Vienna*, New York. (安井琢磨訳『世紀末ウィーン 政治と文化』岩波書店 1983年)。
- (6) Alfred Schutz, *Theorie der Lebensformen*(hers. Ilja Srubar), Frankfurt am Main 1981.
- (7) Alfred Pfabigan, *Max Adler -Eine politische Biographie*, Frankfurt am Main 1982.

- (8) Margit von Mises, *Ludwig von Mises -Der Mensch und sein Werk*, München 1981, S.93.
- (9) Ludwig von Mises, *Erinnerungen von Ludwig v. Mises*, Stuttgart 1978.
- (10) Christopher Pendergast, Alfred Schutz and the Austrian School of Economics, in: *American Journal of Sociology*, Vol. 92(1), pp.1-26.
- (11) 森 元孝 『モダンを問う - 社会学の批判的系譜と手法』(弘文堂 1995年) 266頁の写真を参照のこと。
- (12) Edward Maerz, *Österreichische Bankpolitik in der Zeit der großen Wende 1913-1923*, Wien 1981.
- (13) この銀行について、拙著 40頁および 145頁以下で詳しく述べてある。
- (14) この新聞は新聞の歴史の上でも、また文化・政治史の上でも重要なものである。1997年度から早稲田大学学術情報センターに、そのマイクロ・フィルムが順次納められていく予定である。

『社会学年誌』第 37号 (1996年 3月) から

森 元孝ホームページからダウンロード